ラジオ放送

＜平成26年4月～6月放送分＞

ON AIR

金光教の声

No.407

もくじ ～*contents*

＜先生のおはなし＞

☞ 金光教の教会の先生のお話です。

●言葉を生む心
金光教泉南教会　明渡清志　*page 1*

●神様に助けられた命
金光教東田教会　高津眞男　*page 5*

●ホームステイ
金光教赤羽教会　藤原真美　*page 9*

●人の痛みに寄り添う
金光教金沢教会　菅原信一　*page 13*

●神様におすがりしながら
金光教三木教会　片島斎弘　*page 17*

＜あなたへの手紙＞

☞ 悩みや疑問にお答えするＱ＆Ａ

●第１回 教会の先生ってどんな人?／亡き子　*page 21*

●第２回 戒律はある？／更年期がつらい　*page 25*

●第３回 金光教にパワースポットは？／転職したい　*page 29*

●第４回 神様の心とは？／妻の料理がワンパターン　*page 33*

＜天地は語る＞

☞ 金光教組の教えを解説

●第１回　今こそ天地の開ける音を　*page 37*

●第２回　人の時間・神様の時間　*page 41*

●第３回　神は頼まれるのが役目　*page 46*

●第４回　心配りって何?　*page 51*

《先生のおはなし》

「言葉を生む心」

金光教泉南教会　明渡清志

私たちは、毎日の生活の中で、様々な言葉を使っていますが、何気なく発せられた言葉で傷ついたり励まされたりします。最近、その「言葉」というものは、どこから生まれてくるのか考えるようになりました。

随分昔のことですが、私は交通事故で命を失いかけた経験があります。当時、小学五年生の私は、家路を急ぐあまりに自転車で国道を横切ろうとした時、車と衝突してしまいました。自転車は十メートル以上飛ばされ、道路に強くたたきつけられた私は、脳挫傷を始め、内臓の破損や骨折などの重傷を負ってしまいました。

慌しく医療機器が運ばれる手術室の前で、今夜が峠であることを告げられた両親は、事故の相手の青年と、不安な一夜を過ごしたということです。朝方になって手術は終わり、何とか命を助けて頂きました。

集中治療室から一般病棟に移されたのは三日後。私は、目と鼻以外のほとんどを白い包帯でぐるぐるに巻かれ、全身の痛みで苦しんでいたそうです。

そんな時、事故の相手の青年が病室に入って来ました。彼は苦しんでいる私のそばに恐る恐る近付き、震える声で、「ごめんね」と言ったそうです。その時、私が苦しい息の下で、「僕の方こそ」と言ったのです。誰もが耳を疑った

そうです。激しい痛みを耐えている十歳の少年が、自分も悪かったと謝ったのですから。

当時のことは、私は全く覚えていません。後遺症が心配されるような激しい脳挫傷でしたから。そんな中で出てきた、「僕の方こそ」という相手を気遣う言葉には、両親にとっても意外であったそうです。相手の青年は、声をあげて泣いたそうです。「あの時ほどうれしかったことはなかった」と、後になって彼は言ってくれました。両親も、あの一言は、周りの皆の気持ちを元気にしてくれたと、言っていました。「事故の加害者と被害者という垣根を外し、皆が反省し、感謝し、そして前向きになれた」と。

あれから三十年近くが経ち、私にも妻と子どもが出来、長男はもうすぐ、事故に遭った時の私の年齢になります。日に日に成長していく我が子の姿に昔の自分を重ねながら、あの時の、「僕の方こそ」という言葉は、何によって生み出されたのだろうかということを思います。朦朧(もうろう)とした意識で思い出すことも出来ないような状態ですから、意識的に考えて出た言葉でないことは確かです。

私たちの日頃の生活を振り返ってみても、考えて使っている言葉よりも、反射的に無意識に近い状態で使っている言葉の方が多いのではないでしょうか。目や耳を通して自分の心の中に入ってきたものに、心のどこかが反応して、次の言動が生まれる。大切なことは、自分の心のどんなところが反応するかによって、その次の展開が大きく変わるということではないかと思

います。

金光教には、「神心（かみごころ）」と「人心（ひとごころ）」という言葉があります。自分の都合を先に考え、我が力で何事もしようとするのが人心。それに対して、他人への思いやりを大事にして、自分の計らいを捨てた心を神心と呼びます。この神心とは、特別なものではありません。幼い子どもが、怪我をして泣くお友達に、「大丈夫？」と声を掛ける気持ちが、そのまま神心なのですから、誰しもが持ち合わせている心だと思います。

しかし、その特別でないはずの心が、社会生活を送る中で、特別なものになっている自分に気が付きます。困っている人を見ても、声を掛けた後に自分に降り掛かるかもしれない心配が頭をよぎったりすると、可哀想にと思う気持ちより、関わらない方がいいかも知れないと考えてみたりしてしまう。

また、家族や友人との間でも、優しい言葉を発しようと思ったのに、自分のプライドがストップをかけてしまうということがよくあります。そして、一度タイミングを逃した言葉は、なかなか口には出せません。

そんな時には、もう、神心は奥底に潜んでしまい、人心の方が前に出ていますから、ろくでもない言葉しか出てきません。そうして発せられた、言わなくてもいい一言で、私は、随分と問題のないところに問題を作ってきたように思います。

三十年前の、「僕の方こそ」という一言は、問題のあるところに感謝の心を生みました。

なぜ、あのような言葉が生まれてきたのか。今、私が思うことは、私の生まれ育った環境、すなわち祖父母や両親の生き方です。

両親は、どんな問題でも、まず神様に手を合わせることから始めました。手を合わせて祈る姿が日常の生活の中にありました。明らかに相手が間違っていて、こちらの方が正しいという時でも、まず先に神様に手を合わせる。そういう姿が、十歳の少年の神心を引き出したのではないかと思います。

現在、私は家族と一緒に、毎日金光教の教会に参拝する生活をしています。それは、つい人を傷つける言葉ばかりが出てしまう自分を自覚し、それでも助かっていきたいと願うからです。そのためには、自分の中にある神心を育てることが大切だと思います。そうすれば、とっさの時でも相手を気遣い、自分も生きてくるような言葉が、無意識のうちに出てくるのではないでしょうか。

信仰とは、そのような心を育てていくために、相手のことを思い、本気で祈ることではないかと思います。

「神様に助けられた命」

金光教東田教会　高津眞男

妻は、教会の長男である私と結婚することで、初めて金光教と出会いました。元々、実家には仏壇があり、小さいころから当たり前のようにお参りしていたそうで、神様に手を合わせることにも抵抗はなかったようです。結婚後は、教会での行事にも快く参加してくれて、分からないながらも、少しずつ金光教の教えに触れていました。

これは結婚して半年がたったころ、私たち夫婦が長男を授かった時の話です。

「卵巣に腫瘍のようなものがあります。すぐに大きな病院を紹介しますので」

うれしい妊娠の兆候に、はやる気持ちを抑えながら診察を受けた妻は、医師からの予期しない言葉に驚きました。

別の病院で改めて検査をした結果、確かに腫瘍があることを示す数値が高かったのですが、まだこの段階では、腫瘍によるものなのか、妊娠によるものなのか、判断が難しいとのことでした。それに、妊娠の決め手となる、胎児の心臓の音が確認出来なかったのです。

「とりあえず自宅で安静に」と言われてから、妻は、「どうか、赤ちゃんが私の中で生きていてくれますように」と、必死で神様に祈り続けました。そして、一週間後に再び訪れた病院で、弱々しくも新しい命の営みを確認することが出来たのです。それでもまだ安心は出来ません。

今にも流産しそうな状態とのことで、すぐに入院となりました。また、やはり卵巣には腫瘍があり、妊娠の安定期に入り次第、早急に手術が必要とのことでした。しかしそれは、同時に流産の危険を伴うものでした。

三週間の入院で自宅に戻ることが出来ましたが、程なくして出血があり、退院から一週間で、すぐに再入院となってしまいました。妻は、度々襲うお腹の痛みと出血のため、どうしても最悪の事態が頭から離れず、「もう子どもはダメかもしれない。ごめんね」と自分のことを責めるのでした。

私はそんな妻に、「何があっても神様がして下さってのこと。たとえ赤ちゃんがダメでも、この子は病気のことを教えるために、私たちのところに来てくれたんだから、そのことに感謝をしよう」と言って、励ますことしか出来ませんでした。それはまた、私自身に言い聞かせる言葉でもあったのです。

その後、教会に参っては先生にお届けをし、神様に祈り祈りしながら、どうにか妊娠五カ月目の安定期を迎えることが出来ました。予定通り卵巣にある腫瘍を取り除く手術をするため、直前にＭＲＩの検査を受けましたが、医師から告げられた結果は思いも寄らないものでした。

「どうも卵巣の腫瘍ではなく、子宮の外側にこぶが出来る珍しいタイプですね」

卵巣腫瘍と言われていたものが、子宮筋腫と診断され、しかも、手術は出産した後に改めて行えば良いとのことでした。流産する危険のあ

った手術は、取り止めになったのです。家族中が喜び、一安心したのは言うまでもありません。

しかし、一難去ってまた一難。八カ月目の検診を受けたところ、今度は、「胎盤の位置が下がっている、いわゆる前置胎盤ですから、自然分娩は難しいです。帝王切開で、赤ちゃんを早めに出さないといけません」と言われたのです。ところが、九カ月目に入ると、その前置胎盤が治っており、自然分娩で出産出来るであろうとのことで、再び胸をなで下ろすのでした。

そうして一喜一憂しながらも、何とか出産日を迎えることが出来ました。

しかし、分娩室に入る前に陣痛促進剤を打たれた妻が、にわかに激しい腹痛を訴えたのです。こらえられない痛みのため、緊急手術となりました。

何とか手術は無事に成功して、長男を出産し、同時に腫瘍も摘出することが出来ました。その上、摘出して初めて、それが最初の見立て通り卵巣の腫瘍で、しかも初期のガンであることが分かったのです。激しい腹痛は、大きく膨れた卵巣がねじれたためでした。

後になって、妊娠から出産までを振り返ってみると、全てが神様のお働きとしか思えないことばかりでした。

初め卵巣腫瘍と言われていたものが、途中の検査で子宮筋腫と診断されたこと。もし、卵巣腫瘍と診断されたままでは、予定通り五カ月目に手術が行われ、流産していたかもしれません。

また、前置胎盤が九カ月目には治り、自然分

娩が可能と判断されたこと。おかげで赤ちゃんは、三十九週と六日という歳月を、しっかりと母胎で過ごすことが出来ました。

更には、出産間際に腹痛が起きて、緊急手術になったこと。もしもそのまま自然分娩をしていたら、ねじれた腫瘍が圧迫され、母子共に危険な状態になっていたことでしょう。

そして何よりも、もし妊娠しなければ、この病気に気付くことはなく、手遅れになっていたかもしれないのです。これらのことが何か一つでも違っていたら、妻も長男も生きていられたかどうか分かりません。幸いガンの転移もなく、妻は仕事に復帰して、三年間の検診を経て完治しました。その後、次男も授かることが出来ました。

金光教では、神様に願って助けて頂いたことを忘れずに、今度は人の助かりを願っていくことが、神様へのお礼になると言われます。妻は現在、中学校の教員として、生活サポート主任という、いわば相談係のような仕事をしています。生徒や保護者一人ひとりの助かりと、今後の立ち行きを願っていくことが自分のお役目と思って、毎日の仕事を努めています。

「ホームステイ」

金光教赤羽教会　藤原真美

数年前、私は英語の語学研修のため、一カ月間オーストラリアのシドニー市に滞在し、ホームステイしながら、朝から夕方まで学校に通っていました。

ホームステイ先のお宅は、シドニー駅から、およそ電車で十五分のところにあります。ここの駅は、乗り降りする乗客も少なく、周りも閑散としていて、にぎやかなシドニー駅周辺とはまるで様子が違いました。

お宅は駅から歩いて二、三分程と聞いていましたので、地図を頼りに改札口からすぐにある道を進んでいきました。しかし、歩いても歩いても、シャッターの閉まった店や廃墟寸前の建物ばかりで、民家らしき建物が見えてきません。「きちんと左右を確認しながら歩いてきたので、見逃しているはずはないのだけれど…」。

あれからどれくらい歩いたでしょうか。「いくら何でもこれだけ探して見つからないのはおかしい。もしかしたら逆方向だったかもしれないな」。そう思い焦りながら、今度は来た道を引き返し、反対方向へ向かいました。これで駅前を通過して、少し歩いたら着くと思っていましたが、これまたなかなか見つかりません。

駅から離れると通りはどんどん寂しくなっていきました。通行人も全くいなかったので、通り掛かりの人に尋ねてみようにも出来ません。私は神様に、「どうか私をステイ先の家まで連

れて行って下さい」と、何度もお願いしながら、重たいスーツケースを引いて通りを何度も往復しました。

気が付くと、夕暮れ近くになっていました。すると、駅からだいぶ離れたところにようやくガソリンスタンドを発見しました。

私は、「神様、尋ねる人に出会いました。ありがとうございます」とお礼申し上げ、ガソリンスタンドの従業員に地図とメモしてあった住所を見せて、「ここに行くにはどう行けばいいですか」と聞きました。すると、従業員はしばらく考えながら、「うーん分からないですね」と答えました。私は、「もしかしたら私の下手な英語が伝わっていないのかもしれない」と思い、何度も聞き返しましたが、「ごめんなさい、この場所は分かりません」という言葉しか返ってきませんでした。私はがっかりしてまた歩き始めました。

しばらくして、ありがたいことに別のガソリンスタンドが見つかり、そこでも尋ねてみました。すると、「この住所は今は無いよ」という驚きの言葉が返ってきました。仕方なくスタート地点の駅まで戻り、公衆電話があったので、勇気を出してステイ先に電話してみましたが、誰も出ませんでした。「海外の初めての地でこんなことになるなんて…」

日暮れも近くなり、私は焦りと不安で力尽きて途方に暮れました。「もしこのまま見つからなかったら、ホテルに一カ月泊まるしかないだろうか」。こんなことまで考えていました。

このままでいるわけにはいかず、私は最後の力を振り絞り、「神様、暗くなる前にもう少し歩いてみます。どうか、お宅まで導いて下さい。お願いします！」と、半分泣きながら必死にお願いしつつ、しばらく周辺を歩きました。すると路地が見えてきたので、ひょいと入ってみると、古い工場の跡のような建物が並んでおり、その一角に民家を発見しました。

近付いてみると、庭先で男性が洗車をしていたのです。私は、すがる思いでその男性に住所を見せて尋ねました。男性は、「ちょっと待っててね、妻に聞いてみる」と家の中にいるご夫人を呼び出しました。出てきたご夫人はなんと日本人でした。「助かったー！」と思わず心の中で叫びました。住所を見せると、「この住所は不完全で、番地の続きがあるんじゃないかしら」と言われ、別のノートにもメモしてあったことを思い出し、急いで確かめてみると、最後の数字が漏れていたことが分かりました。ご夫人はその住所を見て、「あら、ここの近くよ。良かったら車で送ってあげるわ」とステイ先の家まで送って下さったのです。

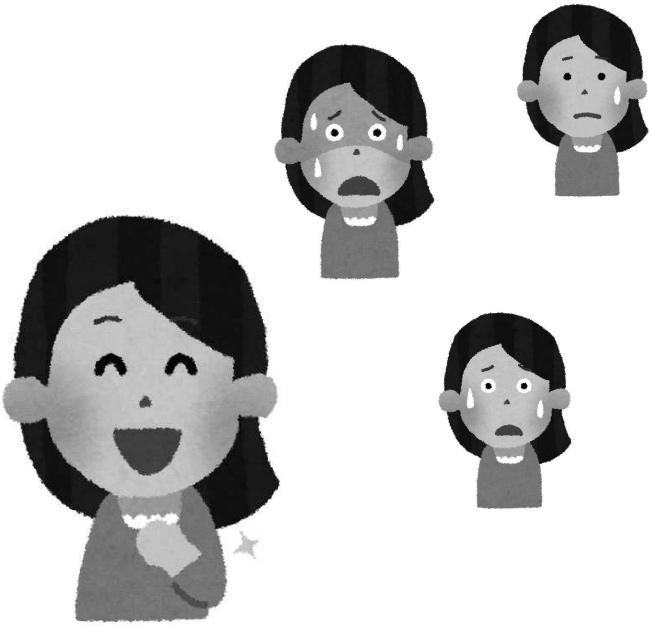
目的の家にようやく着いたのは、日が暮れる寸前でした。ステイ先の奥様が、「なかなか来ないから心配したのよ」と優しく迎えて下さり、その瞬間にホッとして今にも腰が抜けそうになりました。私は送って下さったご夫人にお礼を言い、その場で別れました。

後で分かったことですが、オーストラリアでは節水のため、法律で水まきや洗車の時間が決

まっており、ちょうど私が通り掛かった時間でなければ、庭にご主人はおられなかったとのことでした。諦めずに神様にお願いしたおかげで、時間のお繰り合わせを頂き、この民家に、そしてご夫婦のもとに神様がお導き下さったとしか思えません。そして、自分のミスによる詰めの甘さを反省し、神様にお詫びもしました。

その後、私は無事に一カ月の研修を終え、帰国しました。この出来事について、「運が良かった」「偶然そうなった」と思う方もいるかもしれませんが、私は、「精いっぱい神様に願うことで、私たち氏子を救い助けたいと思って下さっている神様が、その願いをお聞き取り下さり、助けて下さったのだ」と思っています。そして、私たちは神様のおかげを受けているからこそ、生きていられるのだと改めて思わされました。

私のホームステイは神様のお守りの中で無事に終えることが出来ました。



「人の痛みに寄り添う」

金光教金沢教会　菅原信一

長男の高校合格発表の日は、特別な思いで迎えました。

ちょうど受験の一週間前の真夜中、息子が突然、「わーっ」と大きな声をあげました。私は、隣の部屋で寝ておりますが、続けて、「痛い！」という声と畳をバンバンたたく音を聞いて目が覚めました。

「いくらなんでも夜中やぞ。みんな寝ている時にどういうことだ。痛いというなら痛いのだろうけれど、畳まで叩かなくていいだろう。お前の年なら、少々痛いぐらい我慢しろ。眠たいのに面倒くさいな」という思いがわきましたが、同時にハッとして、息子の様子を見るために布団を出ました。以前聞いたある金光教の教会の先生の話を思い出したからです。

九十歳を超えた信心熱心なおじいさんが、治療中の足の痛みに耐えられず、「痛い、痛い」ばかり言っていたそうです。最初は、あんなに信心熱心だったおじいさんがどうして神様におすがりすることも忘れてしまったのだろうと思ったのですが、痛そうな姿を見ているうちに、「本当に痛い時は痛いんだよなあ」と思えてきたそうです。

先生は、おじいさんのつらさを改めて感じ直し、その後も、おじいさんのことを一心に祈りながら、見守っていきました。無事に、おじいさんは、少しずつ頑張って歩く稽古が出来て、

再び歩けるようになったそうです。

真夜中に畳をバンバンとたたいて、「痛い！」と叫びだす息子。私は先生の話を思い出し、畳をたたくぐらいなのだから、それは相当痛いに違いない、と素直に思えたのです。

そう、痛い時は痛いのです。私こそ、人の痛みを本当に分かろうとしない自分でした。叫び声に対して、「それくらいの痛み我慢しろ」と、一瞬でも思ってしまった。これは、全く痛みを理解しようとしない者の発想でした。痛みというのは本人にしか分からない。それを分かろうともせず、迷惑だと考えるのは、自分本位な親かもしれません。うっかりすると日頃からそうなっている私ではなかっただろうか。申し訳なかったと思いながら、隣の部屋へ入りました。

「金光様」とお唱えして、タオルを絞って、それを痛がっている右耳に当てるなど、自分なりに手当てをし、二時間ほど枕元で話をするなどして付き添っているうちに、息子は再び眠りに付きました。朝になって、病院に行くと、中耳炎ということでした。

「人の痛みを理解する」と言葉では簡単に言いますけれども、実際はそう簡単ではありませんね。人の痛みを本当に分かるということなくして、その人が助かるということはないのではないかと思います。「うるさい。黙っていろ！」と言いかねない危うい自分が、一つの話がきっかけで、思い直すことが出来ました。この先生のお話は、神様が私に聞かせて下さったものではないかと思うのです。

中耳炎の治療を受験の一週間前に済ませた息子は、落ち着いて試験を受けられ、おかげさまで、県立高校に合格いたしました。大変な神様のお骨折りを感ずることが出来、私自身が神様にお育て頂いた上に、息子にとって希望通り人生の難関を通り抜けることが出来、喜びも倍増でした。

その後、我が家では、妻が更年期障害で悩んだり、父の認知症の症状が進んだり、また、高校へ進学したその息子が不登校になりかけたりと、いろいろ変化がありました。

父の場合、随分前から、物忘れが多くなったり、今まで一人でこなしてきたことなどが滞るようになり、やっぱり年だなあぐらいに考えていました。耳が遠くなって話が通じにくくなり、会話がすれ違うとこちらもイライラがたまって、口論になってしまうこともありました。

息子の一件があったあと、ある時ふと、「ひょっとしたら、耳が悪いというだけでなく、こちらの言葉が理解出来ないんじゃないか？」と思ったのです。そうだとしたら、私の話していることが分からなくてイライラしていたのは父

の方で、私なんかよりつらかったのではないだろうか？　膝が痛い、頭が痛い、話が分からない、という父の抱える問題に一緒に向き合っていかなくてはと、思えてきたのです。

その後、父が体調を崩し、病院へ行く機会があった時、認知症の検査を受けることになりました。脳の萎縮が認められ、しかも言語機能をつかさどる部分に支障があるということが分かったのです。やっぱり。当たり前に出来ていたことが出来なくなっていることに対する戸惑いやつらさを一緒に感じながら、父に寄り添っていかなくてはと思わせて頂いております。

おかげさまで、父は現在、家に居ながら、時々デイサービスも利用し、食卓に家族がそろうことを喜び、周囲の人が笑顔でいることを喜びながら、毎日を過ごしている様子です。

こちらの都合で考えてしまって、世話をしなければいけない自分が被害者だという意識になることは、今ではなくなったような気がします。目の前の相手が一番悩んでいるのだと素直に思えるようになりました。あの真夜中の経験を通して相手に寄り添っていける自分にお育て頂いたことが、その後の妻や息子の場合でも、生きたように思えます。

神様のおかげで、私ども家族は、お守り頂き、お育て頂いております。信心をもとに何事も通らせて頂きたいという思いを新たにしているところです。

「神様におすがりしながら」

金光教三木教会　片島斎弘

私がご奉仕させて頂いている教会に、三十代の男性がお参りになられました。

その方は、ずっとうつむいたまま、教会の玄関先に立っていました。そして、私に、「話を聴いてくれますか？」と尋ねられました。私は、「はい。ここは誰がお参りしてもいいので、どうぞ」と、教会に入ってもらいました。そして、私はこの人のお役に立てますようにと、神様にお願いしながら話を聴かせてもらいました。

その方は私に、「何もする気力がない。仕事はしたくない。お風呂も入りたくない。こんな自分なんか生きる価値はない。こんな自分は神様に見放されている。死にたいけれど死ぬ勇気がない。過去に戻ってやり直したい」と心の内を話して下さいました。

続けて、「私はいつも、自分はありがたい環境だということが分からず行動してしまい、後悔することが多いのです。ちょうど五年前、仕事を探しにハローワークに行きました。しかし何も決まらず、帰ろうと外に出た時に、車から降りてきた方に声を掛けられました。その方は、『私の所で就職しないか？』と言ってきました。そして、内容を詳しく聞かせてもらい、あっという間に仕事が決まりました。しかし、たった三カ月で辞めてしまったのです。

私には、両親が亡くなっていません。今思えば、こんなにスムーズに決まったのは、両親が

私に与えてくれた就職先に思えるのです。また、その職場、仕事内容は、私にとって、いい環境でした。親にも申し訳ありません。だから、過去に戻りたいのです。ずっとそのことを考えて後悔ばかりしています」と話されました。

私はその方に、「よく参拝して下さいました。信心すれば絶対助かります。ご両親はあなたのことを絶対見放したりせず、今でも絶対応援して下さっていると思いますよ。あなたは、今までの人生の悪いことばかりを見ているのではないですか。その過去の中にも良いことはあったはずです。得たものもあったはずです。そこに目を向ければ、悪い過去は良い過去になりますよ」と、助かって欲しいという気持ちで言わせてもらいました。

しかし、その方の心には全く私の言葉は響きませんでした。その時ふと、「この方はアドバイスが欲しいのではない。ただただ、自分の話を受け止めて欲しいんだ。だから響かないんだ」と思わされました。そこで改めて、「あなたが助かるためのお願いは何でしょうか。私はあなたの願いに沿って神様にお願いさせて頂きます」と言うと、この方は、「それは過去に戻ることです」と前と同じことを言われました。

私は内心、「それは無理だろう」と思ってしまいましたが、その方に、「分かりました。その通り、神様にお願いさせて頂きます」と言ってお祈りをさせて頂きました。お祈りを始める前にその方に、「正直、どうやってご祈念したら過去に戻れるか分かりません。自分には一生

懸命時間を掛けて神様におすがりするしか出来ません。ですので、長くなるかもしれません。苦痛でしたら、帰っても構いません」と言わせてもらいました。私は、「結果がどうであれ、この方の願いに沿ってお願いしていく。この方自身を助けるのは自分がすることじゃない。神様どうぞ、この方が助かりますように。どんな形でもいいですので、過去に戻ることが出来ますようにお願い申し上げます」というように、ひたすら神様にすがりお祈りさせてもらいました。

結果、過去には戻れませんでした。しかし、その方は、「僕のお願いをここまで真剣に聴いてくれて、ここまで祈ってくれた人は初めてです。ある人からは、『過去になんか戻れるわけがない。何を甘いこと言ってるんや』と言って真っ向から否定されました。しかし、あなたは、分かるはずのない、私の気持ちを分かろうとして下さいました。ありがとうございました」と言って帰られました。その言葉を聞いて、どんなお願いでもその方の心に寄り添って、神様にお願いさせて頂くことの大切さを教えられました。

それからその方は、毎日お参りされるようになりました。その都度色んな話を聴かせて頂き、一緒に神様におすがりさせて頂きました。

それから一カ月が過ぎたころ、その方が、生き生きした顔でお参りされ、こう言われました。「実は昨日、過去に体験したような感情になれました。というのも、ある方から就職の話を頂

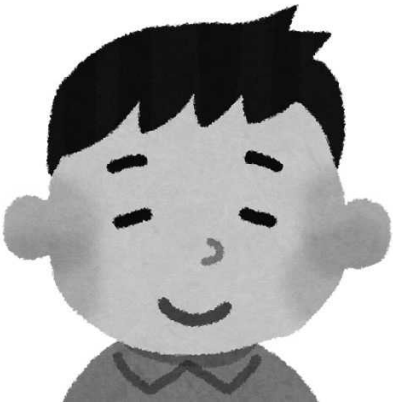
いたのです。しかも、決まりそうです。このスムーズに就職が決まりそうな状況は、五年前の就職が決まった時と似ていました。その時、『あぁ、神様、過去に戻してくれたんだ』と思いました。でも幸せには感じませんでした。過去に戻れたら幸せになれると思っていましたが、勘違いだったのかもしれません。今現在が大事なのかもしれません」と言われました。

そして、この日を境に、その方は、出来なかったお風呂に入ることや、掃除、洗濯が出来るようになり、働くという気力も生まれ、就職することも出来ていきました。その時この方は、「神様は何も出来なかった私、失敗を犯した私でも見放さないんですね」と涙を流して語って下さいました。

そして今、元気にお仕事を続けておられます。

金光教の教祖様のみ教えに、「神様は親、人間は子、親子の情はどこまでも変わるものではないぞ。親神様は人間氏子がかわゆうてなられぬのぞ」とあります。

ここからも神様におすがりしながら、お役に立つ人にならせて頂けるよう信心を進めてまいりたいと思います。



《あなたへの手紙》第一回

「教会の先生ってどんな人？／亡き子」

皆さん、おはようございます。西に六甲の山を望む兵庫県尼崎市にあります、阪急塚口教会の古瀬真一と申します。どうぞよろしくお願い致します。

最初は、神戸市にお住まいの四十代の会社員、トモさんから。

「いつも聞かせてもらっています。仕事で外回りをしている時、金光教の教会があるのに気が付きました。ラジオでは、心安らぐお話が多いので、一度教会に伺ってみようかと思います。金光教の教会では、どのような方がいらっしゃり、応対して下さるのでしょうか？」

このようなご質問です。

トモさん、いつもお聞き下さっているんですね。ご質問も、ありがとうございます。

早速ですが、教会で、皆さんに応対させて頂くのは「金光教の教師」です。信者さんたちからは「先生」と呼ばれていて、訪ねてこられた方のお話をお聞きしたり、神様にお願いしたりするのが役目です。

大抵、教会の先生は、家族と一緒にそれぞれの教会で暮らしていて、家族と力を合わせ、神様のご用に当たっています。私も、妻と子どもたち、そして、金光教教師である両親と共に、

教会で暮らしているのですよ。皆さんに参拝して頂ける時間を、一応決めてはいますが、いざという時には、たとえ真夜中でも、皆さんのお話を伺う心構えで、いつも生活しています。

さて、その教会の先生たちはというと、実にバラエティ豊かなんです。教会ごとに、いろいろな先生がいます。男性も女性もいますし、若い人からお年寄りまで、年齢の幅も広いんです。例えば私は、建設コンサルタント会社で働いていましたが退職し、二十七歳の時に金光教教師になりました。大工さんや看護師さん、電車の運転手さんだった人、警察官や自衛官だった人など、いろいろな人がいます。

こんな風に、年齢も、仕事の経験も様々ですが、金光教の先生に共通していることがあります。それは、悩みや悲しみを抱えて苦しんでいる人を、放ってはおけないというところです。かつて自分のつらい胸の内を、教会の先生が、親身になって耳を傾けて聞いて下さり、神様に祈って下さった。教会で、静かにお祈りしているうちに、すっきりした気分になれた。そういう経験があるからこそ、苦しんでいる人に元気になって欲しい、絶対、助かって欲しいという強い願いがあるのです。

そんな願いを胸に、岡山県金光町にある金光教学院という養成所に入って、同じ志を持つ人たちと寝起きを共にして修行を積み、金光教の先生になるわけです。

トモさん、いつでも、お近くの教会の先生に、会いに行ってみて下さいね。

続いては、神奈川県の三十一歳、聡子さんからです。

「つらくて眠れないまま迎えた朝、偶然ラジオを聞きました。思い切ってお尋ねします。私は、たった一人の幼い子どもを不慮の事故で亡くしました。寂しくて、その寂しさをうずめるように次の子を出産したのです。でも、その子を見ていると、『あの子はこうだったな』『あの子は、あと何年何カ月で死んでしまったのだな』と、亡くなった子のことを思い出してしまいます。せっかく授かったのに、素直に喜べない私。子どもにも申し訳がなく、つらくて苦しいのです。どうしたらいいでしょうか？」

このようなお尋ねです。

本当につらい中で、お尋ね下さったのですね。少しでも、聡子さんのつらさが和らぐようにと願いながら、お話させて頂きます。

聡子さんは、亡くなられたお子さんだけではなく、二人のお子さんの、優しくて、愛情たっぷりのお母さんなんだなあと思いました。そして、今、聡子さんを苦しめているものは、「再び悲しい出来事に遭ってしまうのではないか」と、二人目のお子さんを案じる、愛情あればこその不安や心配なのかもしれないと、そんな風にも思いました。

聡子さんが、亡くなられたお子さんのことを、いつも思い出してしまうのは、お子さんへの深い愛情の現れなのでしょう。成長していく二人

目のお子さんを、しっかりと見守りながら、亡くなられたお子さんのことも、片時も忘れずにいらっしゃるのですから。

聡子さんの心に、いつも一人目のお子さんがおられる。私はそのことを、次のような金光教の教えに通じるなあと思うのです。

それは、「神様から授かった魂は生き通しである。体は死んでも、魂は、生き通しである」という教えです。

姿形は見えなくなっても、神様から授かったお子さんの魂は、いつも家族と一緒におられ、下のお子さんの成長も応援してくれている。そして、聡子さんが、毎日を掛け替えのない日として生きていくことが出来るように願っておられることだろうと信じています。

聡子さん、もしよろしかったら、一度金光教の教会の先生に、これまでのこと、今抱えている心配なこと、これから先のことなど、いろいろとお話しなさってみてはいかがでしょう。

私も、聡子さんのこと、そして、お二人のお子さんのことをずっと祈っています。

聡子さん、そして、最初にご質問下さったトモさん、ご質問、お悩みをお寄せ頂き、ありがとうございました。

《あなたへの手紙》第二回

「戒律はある？／更年期がつらい」

おはようございます。京都市の伏見にあります金光教墨染教会の松岡光一です。

兵庫県にお住まいの三十代の男性から次のようなご質問を頂きました。

「時々、この番組を聞くことがあって、いいお話だなあと思うことはあるんですが、でも、宗教というと、正直、ちょっと怖い感じもするんです。一度入信すると、抜けられなくなるとか、守らないといけない戒律があったりして、何か縛られるような感じがするのですが、金光教にも、そうした戒律や義務があったりするのでしょうか？」

このようなお尋ねを頂きました。

宗教に対して、ちょっと怖い感じがするという、正直なお気持ちを聞かせて頂いたように思います。戒律によって、縛られるのではないか、そんな心配をお持ちのようですが、確かに、宗教によっては、「お酒を飲んではいけない」とか、「肉を食べてはいけない」とか、「肌を見せてはいけない」という戒律があったりしますし、それをはたから見ていますと、とても窮屈に見えるかもしれません。でも一方で、そうした戒律を守るということは、ついつい勝手気ままになってしまい、知らず知らずのうちに道を

誤ってしまうところを、事前に食い止め、生き方を整えてくれる、そういう面もあると思うんですね。

そうとして、金光教には、戒律があるのかというお尋ねですけれども、人の生活をある意味で縛るような戒律は、金光教にはありませんし、入信することで課せられる義務のようなものもありません。

それは、金光教の神様が、私たち人間を始め、天地のあらゆる命を生かし、育んで下さる神様だということに、深く関わっていると思います。一つひとつの命が、本当に生き生きとした働きを現すように、願って下さり、働き続けて下さっている神様なんです。

金光教には、こんな教えもあるんです。

「彼岸餅などをこしらえる時に、子どもがそばで、くれ、くれと言うのを、神に供える前はいけないと言って頭をたたいたりしては、神は喜ばない。先に子どもにやって喜ばせておいて、それから神に供えてくれれば神は喜ぶ」

どうでしょうか。ちょっと、ホッとする教えだと思いませんか。神様を大切にしようと考えるあまり、まずは神様にお供えしてからでないとダメだと、かたくなになっては、そばにいる子どもは悲しい思いをします。神様は後でもいい。欲しがる子どもをまず喜ばせて、とおっしゃる、そんなおおらかな神様なんです。

ですから、もし、お近くに金光教の教会があるようでしたら、どうぞ安心してお参りして頂ければと思います。入会金を取るようなことも

ありませんし、お参りするのも、しないのも、自由な宗教ですから、どうぞご安心下さい。

では次に、三重県にお住まいの五十代の女性からのお尋ねです。

「私は、更年期障害で何年も病院に通っているのですが、体調の変化が激しく、つらくてたまらないのです。何とかならないでしょうか？」

このようなお便りを頂きました。

「体調の変化が激しく、つらくてたまらない」とありますが、体の調子が優れないと、生活の全てがつらくて、苦しいものになりますし、それが何年も続いておられるのですから、本当におつらい毎日なんだと思います。

そんな中、こうしてお手紙を下さった訳ですから、少しでもお役に立てるお話が出来ればいいのですが、少し聞いて頂けますでしょうか。

これは、私が奉仕する教会にお参りになっている七十代の女性の話なんですが、数年前に、自転車でこけて左ひざを複雑骨折され、二十一針も縫う大けがをした方があるんです。その方がけがをされた時のことですが、病院から教会に電話を掛けてこられました。その時に話された、その言葉が、今も私の中に印象深く残っているんです。その方は、こんな風におっしゃいました。

「実は、自転車でこけて骨折してしまい、病院に運ばれたんです。でも、こけた時に、歩道

側に倒れたので助かりました。もし、車道側に倒れていたら、もっと大変なことになっていました。良かったです。それにちょうど、倒れている時に知り合いの方が通り掛かって下さり、救急車を呼んで下さったので、助かりました。また運んで頂いた病院も、自宅の近くの病院でしたから、本当に良かったです」と、おっしゃったんです。

大きなけがをして、これから先、どうなるか不安もいっぱいあるような時に、「このことが良かった。このことも良かった」と、喜びの言葉を次々と話されたんです。私は、その電話を聞きながら、何てすごい方なんだと思いました。つらい苦しいことの中にも、喜びを見つけていかれる。なかなかすぐに出来ることではないかもしれませんが、私も、この方のような生き方がしたい、そんな心を育みたいと思いました。

更年期障害で、毎日、おつらいことと思いますが、その中で一つでも喜べることがあれば、そこを捉えて喜んでいく。一つでも喜べることを見つけていく。そういう生き方の中から、苦しみを乗り越える力がわいてくるのではないでしょうか。

ここからお体が少しでもお楽になられますよう、お祈り申し上げます。

《あなたへの手紙》第三回

「金光教にパワースポットは？／転職したい」

おはようございます。三重県は松阪市、そう、あのおいしい牛肉で有名な所です。その松阪にあります、金光教松阪新町教会の水野照雄です。

今日最初のご質問は、愛知県にお住まいの二十五歳の女性、アキコさんからです。

「金光教には、パワースポットはありますか？」

このようなお尋ねです。

ありがとうございます。パワースポットですか。アキコさんも、お隣の愛知県ですから、よくご存じのことと思いますが、私の住んでいる三重県には、伊勢の神宮があります。去年は、二十年に一度の式年遷宮ということで大変にぎわいましたが、ここは、「日本一のパワースポット」とも呼ばれているそうです。

パワースポットというのは、「そこに行くだけで心が清められたり、癒やされたりするような、特別な力を秘めた場所」といったような意味だそうですが、神宮がこのように呼ばれるのは、何となく分かる気もします。樹齢何百年という立派な木々や、清らかな川の流れ、その場にいるだけで心洗われる、ということはあるだろうなと思います。

では、金光教ではどうなのか、ということで

すが、まずは、「どこでもパワースポット」です、とお答えしたいと思います。

金光教の教祖、金光大神様は、「神様のご神体は天地である」とも、「目には見えないが、神の中を分けて通っているようなものである」とも教えています。つまり、私たちが存在するこの天地、自然、この世界のどこにでも神様はおられるのだ、ということです。あそこには神様がおられるけれども、ここにはおられない、といったことではないのです。つまり、良い場所も悪い場所もないのです。

よく占いなどで、「こちらの方角に引っ越してはいけない」とか、「旅行してはいけない」というのを耳にしますが、金光教では、そのようなことは言いません。それは、先ほどお話ししましたように、どこにだって神様はおられるのだから、どこかこちらだけが悪い方角ということもないのです。

よく目を凝らし、耳を澄まし、五感を研ぎ澄ませば、お天気の移り変わりや、ちょっとした空気の動き、あるいは、人の言葉や働き、自分の心…。こちらの心の向け方次第で、どこにいても、いろんなものから神様のお働きを感じることが出来るのではないでしょうか。

「神様のお働きを感じる」というと、ちょっと取っつきにくいかもしれません。言い換えてみますと、いろいろな事柄や、たくさんの人や物との関わりの中で、今、私が、ここに生きている、という実感。その不思議さを感じること、と言っても良いかもしれません。

実は、今あなたのいる所。それが、「パワースポット」なのです。

次は、四十四歳の男性。サカモトさんという方からです。

「サラリーマン人生も折り返し地点を迎え、張り切っていたのですが、今年になって、これまでとは全く違う部署に変わることになりました。慣れないこと、初めてのことの連続で戸惑うことばかりです。人間関係のストレスもたまり、精神的にも肉体的にも、参ってしまいそうで、転職も考えています」

このようなお悩みです。

サカモトさん、ご相談ありがとうございます。仕事のストレス、毎日のことですから、おつらいですね。

一昔前なら、「一度どこかの会社に就職したら、一生勤めあげるのが当たり前」だったのでしょうが、今は、そうでもなくなっているようですね。本当に毎日の仕事や人間関係がつらくて、それこそ、「参ってしまいそう」と言われるくらいでしたら、転職を考えられるのも無理はない、と思います。

でもその前に、ちょっとお話をさせて下さいね。

天職という言葉があります。一般的には、その人の性格や才能に合った仕事という意味で用いられるようですが、元々は文字通り、天の職

業、天から授かった仕事という意味があるそうです。

仕事って、会社のためにするのでしょうか、それとも自分のためにするのでしょうか？　もちろん、そのどちらでもあるでしょう。でも、それだけではありません。社会の中の役割を担うとか、誰かの役に立つとか、そういったことがあるのだと思います。お仕事の種類や内容によっては、直接見えにくいかも知れないけれど、「ここで私が頑張ることで、どこかの誰かが喜んでくれる」ということがあるはずなんです。「天職」ということでいうと、「誰かを幸せにするために、天から授けられた役目や仕事」といってもいいかもしれません。

こんな風に、仕事ということの意味を少し広く考えてみてはどうでしょうか。それで、前向きに取り組んでいけるようなら、今の職場でもうちょっと頑張れるのではないかと思います。

それでもやっぱり、「参ってしまいそう」なら、その時は、迷うことはありません。サカモトさんによりふさわしい転職先を探しましょう。心が折れてしまったり、体を壊してしまったりしてからでは遅いのですから。

サカモトさんが、この金光教のラジオにご相談下さったのも、何かのご縁だと思います。お近くの金光教の教会に参拝して、先生に思いの丈を話してみられてはどうでしょうか。金光教の教会ではいつでも、先生が親身になって悩みを聞いてくれます。きっと明日に向かうパワーが生まれると思いますよ。

《あなたへの手紙》第四回

「神様の心とは？／妻の料理がワンパターン」

おはようございます。岡山県邑久教会の小林眞です。

早速ですが、東京にお住まいの四十歳の主婦の方から、こんなご質問を頂きました。

「先日、このラジオ放送を聞いていたら、『神様の心』という言葉が出てきました。この『神様の心』とは一体どんな心なのでしょうか。分かるような気もするのですが、どうもはっきりしません。教えて頂けませんか？」

こんなご質問です。

そうですね、神様という言葉は使っても、神様を言葉で説明するのは難しいですよね。神様は声もなければ形も見えませんからね。でも、その「神様」、実は特別に信仰をしていない人でも、世間一般で使ってますよね。「あの人は神様のような人だ」と。その「神様のような人」というのはどんな人のことを指しているのかというと、それは、「自分のことはさて置き、損得を忘れて他人のために一生懸命に働く」。そんな人のことですよね。

なぜそこまで出来るのか、不思議に思えることもあるのですが、どうもお互い人間の心の中に、難儀な人を見ると、「かわいそうに」と思える、そんな心が備わっているようですね。も

ちろん我が子に対してもそうで、私には二人の子どもがいるのですが、その子たちがまだ小さかった時、高い熱を出して苦しんだことが何度かありました。そんな時、「どうぞ早く良くなりますように」と、夜も寝ずに祈ったことがありました。何を考えるでもなく、「どうか良くなりますように」とそれしかありません。

人間は誰しも、他人であれ我が子であれ、可哀想な人を見ると、「何とか助けてあげたい」、そんな気持ちになるものです。一言で言うと、そんな心が神様の心なんです。お分かり頂けましたでしょうか？　もっといろんな話を聞いてみたいと思われたら、遠慮なくお近くの教会に行ってみて下さい。

続いては、広島県にお住まいの六十四歳の会社員Aさんからです。

「長い間サラリーマン生活を続けてきましたが、間もなく定年を迎えることになりました。二人の娘は嫁いでいて、今は妻と二人暮らしです。実はその妻の作ってくれる料理のことなんですが、味はまあおいしいのですが、子どもたちがいなくなってからというもの、レパートリーがだんだん少なくなり、いつも同じようなものばかりがテーブルに並ぶようになりました。私には特にこれといった趣味もなく、楽しみといえばただ食べることだけなんですが、妻に何と言えば改善してもらえるでしょうか？」

こんなご質問です。

そうですか、それはちょっと寂しいですね。レパートリーが減ったのは、二人だけになったということで、力が少し抜けたんでしょうか。

ところで、Aさん、私はあなたと同じ年なんですが、若いころはやはり、「男子厨房に入るべからず」。それをいいことに、全然料理などしようともしませんでした。ところが結婚して十数年たったころ、妻が病気で一カ月ほど入院したことがあり、仕方なく小学生と中学生、二人の子どもたちのために料理を始めたんですが、最初はもう大変でした。料理の本には、「塩を適当に」なんて書いてあるのですが、その適当が全然分からない。それでも、「おいしい、おいしい」と言って子どもたちが喜んでくれたので、その言葉がうれしくて頑張りました。

妻が退院して元気になると、また料理はしなくなったんですが、それがあるきっかけで、もう一度料理を始めることになったんです。

それは、毎日食事を作ってくれているのに、妻にろくにそのお礼も言わないで、それどころか逆に、コロッケが出る度に、注文を付け続けたんですね。「どうもお店のとは味が違う」って。それでしまいに妻が怒って、「そんなに言うんだったらあなたが作ってみせて」ということになって…、まあ、男の意地というんですか、必死になって作ったんですよ。それで、出来上がったコロッケを食べた妻が、「おいしい。やっぱりお父さんが作ったコロッケはおいしい。これからはコロッケはお父さんが作って！」と

いうことになったんです。これには参りました。

でもその時、食事は毎日のことで、作るのにお休みがないですから、食事を作るのは大変な苦労なんだということ、そして、「おいしい」と言ってもらえることはうれしいものだということに気づかされました。

ところでAさんの質問ですが、「妻に何と言えば改善してもらえるか」でしたね。そうですね、「ありがとう」でしょうね。今までずっと食事を作ってきてくれたことに対しての感謝の言葉でしょうね。お礼もしないで注文だけ付けるというのは、やはり順序が間違っていますから。

Aさんは趣味が全然ないということ。でしたら、これは提案なんですが、これからは時々でも厨房に入ってみたらいかがでしょう。作ってもらったものを食べるのもいいですが、作ったものを食べてもらって喜んでもらうというのもまた、いいものですよ。

最初は大変ですが、お父さんが料理を始めたと知ったら、お嫁に行かれた娘さんたちも、きっと喜んでくれると思いますよ。

《天地は語る》第一回

「今こそ天地の開ける音を」

ナレ　金光教の教祖である金光大神の教えに次のようなものがあります。

「今、天地の開ける音を聞いて、目を覚ませ」

今日はこの教えについて先生にお話をお伺いします。

聞き手　先生、よろしくお願いします。

先生　こちらこそ、よろしくお願いします。

聞き手　まず聞きたいのは、「天地の開ける音」ってどんな音なのかということです。先生はその音を聞いたことがあるんですか？

先生　そうですね、「天地の開ける音」ってどんな音か興味湧きますよね。私は、その音を聞いたことがありますよ。でも、そのことについては後でお話しますから、この教えを金光教の教祖がどのように伝えたのかを聞いて下さい。

聞き手　はい。

先生　今から百四十年位前の話なんですが、今の岡山県倉敷市に住んでいたある方が、病気で目が見えなくなったんです。そこで、この方の代わりに奥さんが教祖様のところに度々お参りをして、数年後におかげを頂いて目が見えるようになったそうなんです。この方は本当にありがたく思って、教祖様のところへお礼のお参りを重ねていましたが、ある時、今日のみ教え

である、「今、天地の開ける音を聞いて、目を覚ませ」と教祖様から言われたのです。

聞き手　へぇ～そうなんですか。でも、目を覚ますも何も、見えない目が見えるようになったんでしょう。どうして教祖様はそんなことを言われたんですか。

先生　恐らくなんですが、目が見えるようになった喜びも、日が経つにつれてだんだん薄らいでいくと思うんです。そして、いつかは目が見えることが当たり前になってしまうんでしょうね。そこのところを教祖様は、「もっとはっきり目を覚ませよ。その目をもっと大きく見開いて、天地のお恵みやお働きを見極めていきなさいよ。ただ目が見えるようになっただけで止まってはいけないぞ」と諭されたんじゃないでしょうか。

聞き手　なるほど、そうですね。ところでやっぱり気になるんですが、「天地の開ける音」ってどんな音なんでしょうか？

先生　はい、私が思いますに、一言で言えば神様の声なんでしょうね。私には毎日聞こえますが、あなたには聞こえませんか？

聞き手　えっ、神様の声って…分かりません。聞こえるわけないですよ。

先生　そうですか、でも私には神様が私たち人間を生かそう生かそうとする声が聞こえるんですよ。

聞き手　神様が私たちを生かそうとする声ですか？

先生　はい。それを私は、「天地の開ける音」

だと思ってるんです。数年前のことですが、私は心臓病を患って、これからどうしたものかと悩んでいた時期があったんです。病名は狭心症なのですが、病院の先生からは、この病気は完治しないから一生付き合っていくことになると言われたんです。それまでずっと健康だったので、自分が病気であることを受け入れることが出来ませんでしたね。

聞き手　先生、そんな大変なことがあったんですね。

先生　もう目の前が真っ暗ですよ。でも、どんなに悩んだって、この病気からは逃げられないんだから、うまく付き合っていくしかないのかなあと。そんな時、ある朝目覚めて、何気なく胸に手を当てると、心臓の鼓動が聞こえたんです。その瞬間、「あっ、これは神様の声だ！」と思ったんです。ドクッ、ドクッ、ドクッという心臓の音が、「生きてくれよ。私が守っているぞ」という神様の声に聞こえたわけですね。その時確信したんです。これが、「天地の開ける音」だと。この瞬間まで心臓病のことばかりにとらわれていましたが、「私は生まれてからずっとこの心臓の鼓動と共に生きてきたんだ、神様が生かして下さって今があるんだ」とありがたく思えたのです。食べ物や水や空気などといった天地のお恵みがあり、また心臓の鼓動を始め血液の流れや内臓の働きや呼吸、そういった自分自身ではどうにもならない体の機能が毎日時々刻々に動いているからこそ、生きていられることを改めて感じて、本当に目が覚める思

いがしたんです。今も毎朝目を覚ますと、手を胸に当てるんですよ。「ああ、今日も命を頂いて目が覚めたんだ。神様ありがとうございます」とお礼を言って、一日のスタートにしているんです。

聞き手　先生、そうだったんですね。でも私だって心臓の鼓動は感じますが、それが神様の声とはちょっと…。

先生　まあ、そうですよね。「天地の開ける音」が聞こえる状況は人それぞれ違うと思います。人には、本当にありがたくて神様に感謝する時があると思うんです。神様から生かされているんだと心から実感することがあると思うんです。その訪れた瞬間こそが、「天地の開ける音」が聞こえる時ではないでしょうか。あなたにも、その時が来ると思いますよ。

聞き手　本当に私にもその時が来るんですかね？

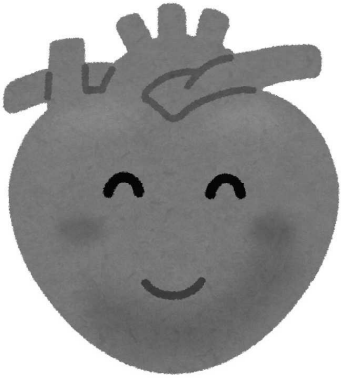
先生　今、その時が来ているかもしれませんよ。あるいは、もうすでに神様から助けられていたことがあるけれど気付いてない、目覚めていないのかもしれませんね。まずは、今、目を閉じ耳を澄まして、それから目を大きく見開いて、神様を感じてみて下さい。

聞き手　そうですね、私も、「天地の開ける音」に耳を傾けてみようと思います。先生、今日はありがとうございました。

先生　こちらこそ、ありがとうございました。

ナレ　今日は、**「今、天地の開ける音を聞い**

て、目を覚ませ」という教えについて、先生にお話をお伺いしました。



《天地は語る》第二回

「人の時間・神様の時間」

ナレ　金光教の教祖である金光大神の教えに次のようなものがあります。

「人は十年は長いように思うけれども、神にとっては、あちらを向いてこちらを向く時間ほどもない」

今日はこの教えについて先生にお話をお伺いします。

聞き手　先生、おはようございます。

先生　おはようございます。

聞き手　今日はよろしくお願いします。今日のみ教え、なんか面白い表現ですね。「あちらを

向いてこちらを向く時間」という表現が面白いなぁと思いました。

先生　そうですよね。私も同じように思いました。もっと格調高く表現出来るのにって。それでは、一緒にこのみ教えを考えていきましょう。まず、このみ教えを聞いてどんな意味だと思いましたか？

聞き手　人間と神様とでは時間の感覚が違うという意味だろうなぁと思いました。

先生　では、「人は十年は長いように思うけれども」とありますが、やっぱり長いと思いますか？

聞き手　う～ん、そうですね。長いと思いますね。僕は今、二十七歳なので、十年前はまだ高校生でした。その頃は一年中サッカーに明け暮れていて、気楽な身分でしたね。そんな僕が就職してサラリーマンになり、結婚して今は一歳の男の子の父親になりましたから、この十年の変化はすごいものです。そう考えると、人は十年を長いと思うでしょうね。

先生　特に変化の多い十年だったわけですね。十年後は三十七歳。もう中間管理職だったりして…。やっぱり十年は長く感じますよね。

聞き手　十年一昔って言いますから、人の感覚では十年前は昔なんだと思います。

先生　その十年が、神様にとってはあちらを向いて、こちらを向くくらいの時間ということは、人間なら、ほんの何秒って感じですよね。ということは人間の十年は神様のほんの数秒に当たる、という意味でもありますね。でもね、

私はある時、もう少し深い意味があることに気付いたんです。

聞き手　深い意味って、どんな意味があるのですか。

先生　意味っていうより、私はこんなことを感じたってことかしら。ほら、ずいぶん前だけれど、ニュースで狂牛病が話題になった時があったでしょう。

聞き手　えぇ。

先生　狂牛病っていうのは、牛の病気で、牛の脳がスポンジ状になって異常行動を起こすという病気なんですけれど、この病気にかかった牛の肉を食べた人が感染して、同じような病気になったというニュースが流れて、大騒ぎになったことがありました。

聞き手　そうでしたね。それで？　先生は何を感じたのですか？

先生　狂牛病の潜伏期間が五年から十年もあるって聞いた時に、「あぁ、このことだ」ってこのみ教えが思い出されたんです。

聞き手　潜伏期間って感染してから症状が出るまでの期間のことですよね。五年から十年なんですか。インフルエンザなら二、三日って聞いたことがありました。

先生　そう、だからインフルエンザはうつっていくのがよく分かりますよね。お兄ちゃんがインフルエンザにかかって熱が出た、二、三日したら弟も熱が出た。「あぁ、うつったね」とか言いますね。ところが、潜伏期間が五年から十年って言ったら、いつ、どんなふうにうつっ

たなんて分からないですよね。十年前に食べたお肉が原因、なんて言われても困ります。

聞き手　そりゃあ、十年も前の、いつ、どこで食べたお肉かなんて絶対分かりませんよ。一週間前だって、何を食べたって言われても分からないんですから。

先生　そうね。それで私はこう思ったんです。例えば、お腹が痛くなったとすると、「昨日の夜に食べたものが当たったかな」とか、「そういえばちょっとあれが臭かったかなぁ」とか考えることが出来るでしょう。それは人間にも分かるのだけれど、神様は十年前のことだって、ちゃんと分かるんだと思ったんです。だって、あちらを向いてこちらを向くほどの時間なんですから。

聞き手　なるほど。

先生　私たち人間にとっては十年前なんて、すごい昔のことだけれど、神様にとっては十年前のこともほんのちょっと前のこと。私たちが、昨日食べ過ぎたからお腹が痛いって思うように、何でもつながっているわけですね。例えば、あなたが十年前、サッカーに明け暮れていた時に鍛えたものは今も身に付いているはずですよね。体力とか協調性とか、体育会系の礼儀正しさとか爽やかさとか。

聞き手　考えたことはありませんでした。でも、そう言われると、うれしいです。サッカーでは、特に結果が残せなかったと思っていましたから。

先生　神様の目から見れば、あの時の努力が

こうなったって、あの時のつらい経験がこう生きているって、ちゃんとつながっているのですよ。

聞き手　なるほど。そうなんですね。

先生　そして、さらにこう思ったんです。神様にとって十年があちらを向いてこちらを向く時間なら、人間の百年間だって、全部お見通し。ところが、人間の世界では百年経てば、すっかり世代が変わっていくほどの時間ですね。ご先祖様の時のことなんか全く関係ないように思うけれども、神様の目からは、ちゃんと筋が通っているんだろうと思うんです。

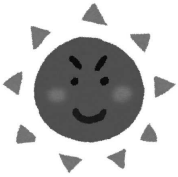
聞き手　そうかもしれませんね。つながっているには違いないですからね。

先生　だから、人間はずっと神様が見守って下さる中で、生きているんだってことを忘れないようにしなくてはいけませんね。目先のことに振り回されずに毎日を一生懸命に生きましょう。

聞き手　なんか、シャンとしました。先生、今日はありがとうございました。

先生　こちらこそ。ありがとうございました。

ナレ　今日は、**「人は十年は長いように思うけれども、神にとっては、あちらを向いてこちらを向く時間ほどもない」**という教えについて、先生にお話をお伺いしました。



《天地は語る》第三回

「神は頼まれるのが役目」

ナレ　金光教の教祖である金光大神の教えに次のようなものがあります。

「神へは何でも願え。神は頼まれるのが役である」

今日はこの教えについて先生にお話をお伺いします。

聞き手　早速ですが、先生、「頼まれるのが役目」ということなんですが、神様は、頼まれたがっているんですか？

先生　そうそう。その通りなんですよ。

聞き手　へーえ、でも…私だったら、頼まれ役なんて、あんまりしたくないですね。面倒ですし…。

先生　ハハハ、面倒ですか。あなたは頼まれるのがあまり好きではない。

聞き手　そりゃあ、よほど何か困っている人に頼まれたら、嫌とは言えませんからね、仕方なく引き受けることもあります。でも積極的に頼まれ役を買って出たいとは思いません。

先生　そういうものですよね。ところが神様は、その面倒なことを、してやりたいと思って下さって、「どんなことでも、私に頼んでくれよ」とおっしゃっているわけですね。あえて下手（したて）に出て下さっているんですよ。

聞き手　どうしてでしょうか？

先生　やっぱり我が子のことが可愛くて仕方

がないんでしょう。

聞き手　我が子、ですか？

先生　そう。神様にとっては、私たち人間は可愛い子どもなんです。だから、喜ぶことをしてやりたくてたまらない。だけど、親に甘えてくる子は、可愛がってもやれるけれど、親に逆らい、離れていく子には、何もしてやれない。このつらさ、ふびんさは、人間の親と同じではないでしょうかね。

聞き手　そうすると…、まず人間の方から願うということをしないと、神様の働きは十分に受けられない、ということですか？

先生　そうなんです。神様は私たちが願う前から、色々心配して下さって、何とか助けてやろうと働きかけて下さっていると思うんですよ。でも、本人がその気になって、それを受け止めようとしないと、神様としても、それ以上どうにも出来ない。例えば、親がおいしいものを作って食べさせてやろうとしても、子どもが食わず嫌いで口を開けなかったら、どうにもしようがないでしょう。だから、願うというのは、神様の働きをしっかり受けていこうと心を定めて、神様の方にちゃんと向かうこと。ほら、ツバメの子が、親に向かって口を大きく開けるでしょう。あれと同じことなんですね。

聞き手　お願いしたら、神様は何でも聞いて下さるんでしょうか？

先生　頼まれるのが役だと言われるくらいですから、どんな願いも漏らさず聞いて下さっていますよ。

聞き手　でも、願い通りになるとは限りませんよね。

先生　良い親は、子どもの願いを何も考えずにそのままかなえてやったりはしないでしょう。例えば、幼稚園児が、「スマホ買って」と言っても、「もっと大きくなるまで待ちなさい」と言いますよね。まして神様は、親は親でも、超一流の賢い親ですから、遠い先まで見通しながら、一人ひとりのために一番良いようにして下さいます。ところが人間の方は、待ちきれなくて、すぐに諦めたり、神様なんか当てにならないと思ったりするんですね。どうですか、あなたは神様に何かお願いしていますか。

聞き手　そうですねえ、お正月の初詣の時に、一年のことをお願いするくらいでしょうか。

先生　初詣に行く人は多いですよね。普段は神様のことを意識していなくても、お正月だけは気持ちが改まって、「家内安全、商売繁盛」とか、「今年はいい年になりますように」とか願う。それはいいんですが、それっきりで次のお正月まで忘れてしまっている人が多いんじゃないでしょうか。

聞き手　ああ、私、まさにそれです。

先生　ずっと願い続けることが大事だと思うんです。願い続けていれば、神様としても、かなえてやりやすいと思うんですよ。さっきのツバメの例えで言えば、お腹をすかしていると思って親がせっかく餌を取ってきても、帰ってきた時には口を閉じて知らん顔しているようなもので…。

聞き手　ああ、それは、残念ですね。

先生　私も学生時代に、学習塾で子どもたちに勉強を教えるアルバイトをしたことがありましてね、その時つくづく、こちらの思いが届かないもどかしさを感じたことがありました。教えてほしいという思いを持ち続けている子は、どんどん吸収していって、「先生のおかげで成績が上がった」と言ってくれるんですよ。でも、勉強になかなか興味を持てない子もいましてね、私は可哀想で、個別に教えてあげようとしたんですが、時間が無いとか何とか言って断るんです。それでテストの結果が悪かったら、「先生の教え方が悪い」なんて言うんですよ。

聞き手　つらいですねえ。

先生　神様もきっと、人間に対して、そういう思いを抱いておられるんじゃないかと思いますね。神様のおかげをしっかり受けられるかどうかは、人間の心がどっちを向いているかで決まる。だから、どうかこっちを向いてくれよと、神様から願うような気持ちで、言葉を掛けて下さっている。それがこの教えだと思います。

聞き手　「何でも願え」とありますが、本当に何をお願いしてもいいんでしょうか。

先生　人から見たら無理に思えることでも、あるいはつまらないと思えることでも、願いというのは、本人にとってみれば、みんな切実な思いですよね。可愛い我が子が真剣に願ってきたことを、神様は決して粗末には扱われません。

聞き手　ちょっと私もお願い事をしてみたいな、と思えてきました。

先生　きっと喜んで聞いて下さいますよ。

聞き手　はい、ありがとうございました。

先生　こちらこそ、ありがとうございました。

ナレ　今日は、**「神へは何でも願え。神は頼まれるのが役である」**という教えについて、先生にお話をお伺いしました。

《天地は語る》第四回

「心配りって何？」

ナレ　金光教の教祖である金光大神の教えに次のようなものがあります。

「心配りする心で信心をせよ」

今日はこの教えについて先生にお話をお伺いします。

聞き手　先生、おはようございます。

先生　おはようございます。

聞き手　今日は、「心配りする心で信心をせよ」という教えですが、短くて何だか簡単そうな教えですね。

先生　いやいや、簡単そうに思えますが、意味は奥深いものがあるんですよ。それではちょっと一緒に考えてみましょう。

聞き手　はい、よろしくお願いします。

先生　まず、「心配りする心」とは、どんな心のことだと思いますか？

聞き手　う～ん、「おもてなし」ということでしょうか？　昨年、オリンピック開催地が東京に決まりましたよね。ちょうどその時に、「おもてなし」という言葉がはやりましたが、その「おもてなし」のように相手の人に対する心遣いや気配りのことですか？

先生　そうです。「おもてなし」、いい言葉ですね。心を込めて相手の人をもてなし、接待をする。人に対して心配りをすること、相手の人の気持ちを思いやることは、とっても大切な

ことであり、素晴らしいことですからね。

聞き手　すると、この教えは、「おもてなし」の心で信心をしたら良いということなんですね。

先生　そうですね。

聞き手　信心って神様を信仰するということですから、相手は神様ですよね。すると、おもてなしの相手は神様ですか？

先生　そうです。では、神様に喜んで頂くにはどうしたらいいんでしょうね。神様はこんな恵みを私たちに下さっています。まず、空気や水、光、熱、食物などたくさんの天地自然の恵みがありますね。そして、意識しないで一日に一万リットル近くもの空気を吸い、新鮮な酸素を体に取り込んでいますし、心臓は毎日およそ十万回も鼓動してその酸素を体の隅々にまで行き渡らせるという命の働きをしてくれています。何とありがたいことでしょうか。人間はみんな平等に神様の恵みやお働きによって生かされて生きているんです。

聞き手　先生、私は今まで空気や水、光など、有って当たり前のものだと思っていましたし、いつも心臓が動いて命を支えてくれていることをあまり意識していませんでした。今、改めて意識してみると、何だかうれしく、ありがたい気持ちになってきます。

先生　そうですね。そのうれしい気持ち、感謝の気持ちを神様に向けて行動に現していくことが大切なように思うんです。

聞き手　感謝の気持ちを神様に向ける、です

か？

先生　人間は皆、神様のいとし子と言われていますから、私たちは、お互いを大切にすることが神様の願われていることではないでしょうか。だとしたら、人に心配りをすること、そのことが神様に対する、「おもてなし」だと思うんですよ。

聞き手　え、それでは心配りは神様というより人にするんですか？

先生　そうです。でもね、以前、私の奉仕する教会に信心するのがつらいと言っていた方がおられたんですよ。その方は、信心深かったお母さんの言い伝えをしっかりと守ってきたそうです。それは、「自分のことよりも先に人のことに気を配りなさい」ということでした。ですからその方は、自分のことは後回しにして、周りの人たちをいつも何かと手伝ってあげたりしてきたそうです。周りの人たちは、事あるごとにお礼を言ってくれましたが、その方自身、ありがたさとか、うれしさというものがあまり湧いてこなくて、つらくてたまらなかったそうです。

聞き手　ふ～ん、そうなんですか。

先生　ええ。お母さんがどうして人に心配りすることを大切にしてきたのか考えますと、お母さんは長く信心してきた中で、生かされて生きている自分というものに気付かれたのではないでしょうか。そして、神様の恵みやお働き、言い換えると天地自然の恵みやお働きに対してのお礼の気持ちを神様に向けることとして、人

に対する心配りをしてこられたのだと思います。

聞き手　それはどういうことですか？

先生　息子さんは、人に気配りをして、人に喜んでもらうことが信心する上で大切なことだとばかり思っていたのですが、お母さんの方は、神様はどうしたら喜んで下さるのかな、と思いながら生活してこられたんですね。そのことが結果として、人への心配り、思いやりとなって現れてきたのだと思いますよ。ですから、単に人に心配りをするのと、神様を通して、人に心配りをすることとは、大きな違いがあるんですよ。

聞き手　そうなんですか。神様への心配りは人への優しさ、言葉遣い、物事への取り組みなど生活の至るところに自然な形で現れてくるんですね。息子さんは、現在どうしているんですか？

先生　はい、とっても元気に信心されてますよ。その違いに気付き、神様にお願いしながら、周りの人たちに心を配り、親切にしておられます。

聞き手　私もそんな心になれたらいいなあ、と思えてきました。先生のお話を聞かせて頂き、元気にならせてもらいました。今日は本当にありがとうございました。

先生　こちらこそ、ありがとうございました。

ナレ　今日は、**「心配りする心で信心をせよ」**という教えについて、先生にお話をお伺いしました。

感謝

金光教本部　ラジオ放送係

住 所　〒719-0111
岡山県浅口市金光町大谷３２０

電 話　０８６５-４２-６４５３

FAX　０８６５-４２-２１１４

メール　w-master@konkokyo.or.jp

KONKOKYO

北海道放送	土曜日 あさ5時10分
東北放送	日曜日 あさ5時00分
ニッポン放送	日曜日 あさ4時30分
東海ラジオ放送	金曜日 あさ5時25分
和歌山放送	日曜日 あさ6時50分
朝日放送	水曜日 あさ4時50分
山陽放送	日曜日 あさ6時35分
中国放送	土曜日 あさ5時50分
南海放送	日曜日 あさ6時00分
RKB毎日放送	日曜日 あさ6時50分
宮崎放送	日曜日 あさ7時10分

こころで聴くおはなし 検索